

# 「都市から農村へと移住する若い女性たちの経験と「場所」感覚—福島県昭和村の「からむし織体験生『織姫・彦星』」に着目して—

久島（くしま） 桃代<sup>1)</sup>

## 1. 発表者について

◆専門は人文地理学。人間が持つ感情や感覚器官といった身体性が、場所の経験や理解にどのように結びつくものなのか、関心がある。

◆お茶の水女子大学大学院博士後期課程ではジェンダー学際研究専攻に所属。社会の中でいやおうなく性化され、ジェンダー化されるわたしたちの身体が、場所の経験にどのような影響を及ぼすのか検討してきた。

## 2. 研究内容

### 【研究背景】

◆「農村空間の商品化」：これまで基本的に「農業生産」の場としてみなされてきた農村が、観光活動や農村のイメージを利用した農産物や商品の販売を通して、その資源が「消費」の対象に

◆農村空間の商品化に関する既存の研究のあり方に対する問題意識：農村に移り住む主体への関心の低さ、報告書などで再生産される受動的、画一的な「消費者」像への疑問

### 【研究目的】

◆農村に向かう人々の経験を「消費」の一語に還元するのではなく、かれらと農村との出会いによって、地域に内在する多様な価値と活用の可能性を持つ資源がいかにか磨かれ、より良い地域づくりを实践していくための土台となっていくかを検討したい

◆農村空間が、移住してきた若者たちの実践と絡み合いながら、かれらにとって意味ある空間として構築される過程を吟味したい

### 【研究対象】「からむし織体験生制度」

◆福島県昭和村総務課企画課の事業として 1994 年にスタート「織姫」と呼ばれる体験生の女性が、村の伝統織物「からむし織」の技術を約 1 年かけて学ぶ。

◆1994 年の開始以来、女性参加者は 2016 年現在までで 106 名にのぼる。そのうち、30 余名が村に残っているといわれている。

---

<sup>1)</sup> お茶の水女子大学 基幹研究員  
連絡先：momoyok@hotmail.co.jp

◆「からむし」とは

△別名「苧麻（ちょま）」「青苧（あおそ）」と呼ばれるイラクサ科の多年生植物。昭和村を含む会津地方では、14世紀ころから栽培が広まったとされ、収穫されたからむしは繊維を取り出した状態で越後に送られた。越後上布、小千谷縮の原料。

△戦後の着物需要の低下や化学繊維の普及などにより、からむしの繊維が売れなくなったため、1970年代、過疎対策と伝統産業の振興を目的に織物産業がはじまる。「からむし織」の誕生。



図1 からむし



図2 織姫とからむし織

【フィールドワーク】

◆2008年ごろ～2015年1月まで：通い（3日～1週間程度／回）による聞き取り調査、参与観察

◆2015年4月13日～11月9日まで：織姫とともに村の空き家を借り、住み込みでフィールドワーク

◆なぜ「住み込み」？

△言語化しづらい織姫たちの経験や思い

△「身体知」としか呼べない、からむしの作業の技に隠された知識

→：からむしと関わる中で、織姫たちのからむしや場所へのどのような認識が生まれるのか？またこの認識が、いかなる実践を導くことになるのか？（本研究の問題関心）

→言語化されたデータだけを分析することの限界。調査者であるわたし自身の身体性をもって把握する必要があるのではないか。

とはいえ、「身体性」だけを見ていればよいという問題でもない。特定の場所と空間の文脈において性化されジェンダー化される身体が、昭和村における織姫たちの経験に、どのような影を落とすのか。

3. 当日の報告では…

以上の知見も踏まえ、発表当日は、織姫たちの語りを手がかりにからむしをめぐる彼女たちの多様な実践について詳しく紹介したい。そして、「消費」の一語には回収しにくい彼女たちの実践の多義性と、そうした彼女たちを含みこみながら、農村の場所や文化が再生産されていく過程を検討する。